

景気動向指数でみる静岡県経済の動向

デジタル戦略局 データ活用推進課
主幹 高橋 伸

1 景気動向指数とは

景気動向指数は、生産、雇用など様々な経済活動における重要かつ景気に敏感な指標の動きを統合したものであり、長期間にわたり経済活動を把握できる統計です。

特徴としては、景気動向指数は対象期間の2か月後に公表されるため、他の経済統計と比較して速報性に優れている点が挙げられます。

また、景気の現状を示す一致指数だけではなく、景気に先行・遅行して動く先行指数・遅行指数を同時に公表しているのも、特徴の一つです。

景気動向指数にはC I（コンポジット・インデックス）とD I（ディフュージョン・インデックス）があります。C Iは、各指標の前月からの変化量を1つの指数に合成したもので、景気の変動の大きさやテンポ（量感）を測定しています。D Iは、各指標を3か月前と比較した時の変化方向を合成したもので、景気の局面（方向）の把握を行います。

なお、C IとD Iそれぞれに、景気に先行して動く先行指数、景気にほぼ一致して動く一致指数、景気に遅れて動く遅行指数の3種類があります。このうち、C I一致指数によって、景気についての総合的な判断である基調判断を算出しています。

2 採用指標について

静岡県景気動向指数では、多くの経済指標の中から景気を敏感に反映する3系列23指標を選び、C I及びD Iを算出しています。採用指標については、静岡県経済をより正確に把握できるよう、定期的に検討会を開催し、指標の再検討を行っています。

図表1 採用系列（3系列23指標）

先行系列（9指標）	一致系列（7指標）	遅行系列（7指標）
新規求人数（除学卒パート）	鉱工業生産指数（総合）	鉱工業在庫指数
入職率（製造業、30人以上）	鉱工業消費財出荷指数	常用雇用指数（全産業、前年同月比）
所定外労働時間指数（全産業、30人以上）	第3次産業活動指数（総合）	民間金融機関預貸率（農協等を除く）
新設住宅着工戸数	百貨店・スーパー販売額	貸出約定平均金利
新車登録台数	人件費比率（製造業）*	消費者物価指数（静岡市、前年同月比）
日経商品指数 ○	有効求人数（除学卒パート）	法人事業税調定額（地方人特別税を含む）
民間金融機関貸出残高（前年同月比、農協等を除く）	輸入通関実績（清水港分）	雇用保険受給者実人員 *
東証株価指数 ○		
企業倒産件数 *		

注 ○…全国数値

*…逆サイクル（景気と逆の動きをする指標のこと。逆サイクルの指標が上昇すると景気は下降し、逆サイクルの指標が下降すると景気は上昇する。）

3 景気動向指数における景気の基調判断

静岡県景気動向指数は、毎月基調判断を公表しています。基調判断の基準については、内閣府が作成している全国版の景気動向指数と同様となっています。

基調判断を行う際には、単月のC I一致指数の前月差では一時的な要因に左右され安定しないため、C I一致指数の3か月後方移動平均、7か月後方移動平均の前月差を中心にして判断します。

図表2 基調判断の基準と一致CI標準偏差

基調判断		定義	基準
①改善		景気拡張の可能性が高いことを示す。	原則として3か月以上連続して、3か月後方移動平均が上昇。当月の前月差の符号がプラス。
②足踏み		景気拡張の動きが足踏み状態になっている可能性が高いことを示す。	3か月後方移動平均(前月差)の符号がマイナスに変化し、マイナス幅(1か月、2か月または3か月の累積)が1標準偏差分以上。当月の前月差の符号がマイナス。
③局面変化	上方への局面変化	事後的に判定される景気の谷が、それ以前の数か月にあった可能性が高いことを示す。	7か月後方移動平均(前月差)の符号がプラスに変化し、プラス幅(1か月、2か月または3か月の累積)が1標準偏差分以上。当月の前月差の符号がプラス。
	下方への局面変化	事後的に判定される景気の山が、それ以前の数か月にあった可能性が高いことを示す。	7か月後方移動平均(前月差)の符号がマイナスに変化し、マイナス幅(1か月、2か月または3か月の累積)が1標準偏差分以上。当月の前月差の符号がマイナス。
④悪化		景気後退の可能性が高いことを示す。	原則として3か月以上連続して、3か月後方移動平均が下降。当月の前月差の符号がマイナス。
⑤下げ止まり		景気後退の動きが下げ止まっている可能性が高いことを示す。	3か月後方移動平均(前月差)の符号がプラスに変化し、プラス幅(1か月、2か月または3か月の累積)が1標準偏差分以上。当月の前月差の符号がプラス。

一致CIの「振幅」の目安(標準偏差)

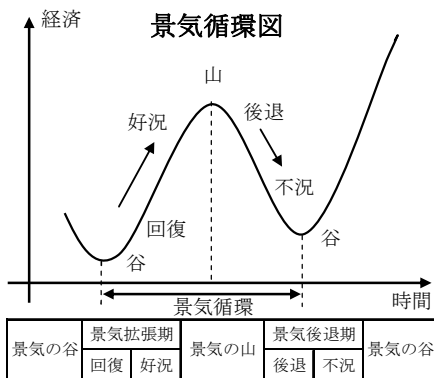
前月差	2.60
3か月後方移動平均	1.38
7か月後方移動平均	0.88

注：①～⑤に該当しない場合は、前月の基調判断を継続する。

3か月後方移動平均：2か月前～当月までのCI指数の値を平均したもの

7か月後方移動平均：6か月前～当月までのCI指数の値を平均したもの

<景気動向指数の基調判断を理解するためのポイント>



ポイント①

景気は一方的に上がり続けたり、下がり続けたりすることはなく、時間の経過とともに好況と不況を繰り返しています。

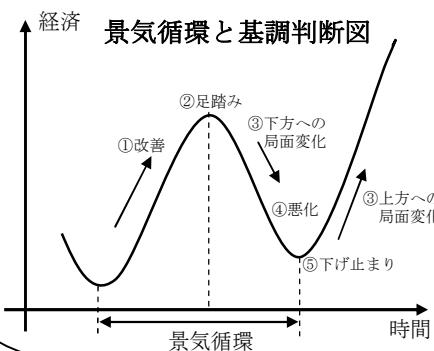
左図のように、景気が「好況→後退→不況→回復」といった一連の流れを繰り返していくことを景気循環と呼びます。

ポイント②

静岡県景気動向指数における基調判断は、上記図表2のとおり、5段階に分かれています。

「改善」「足踏み」は景気拡張期、「悪化」「下げ止まり」は景気後退期にあたります。

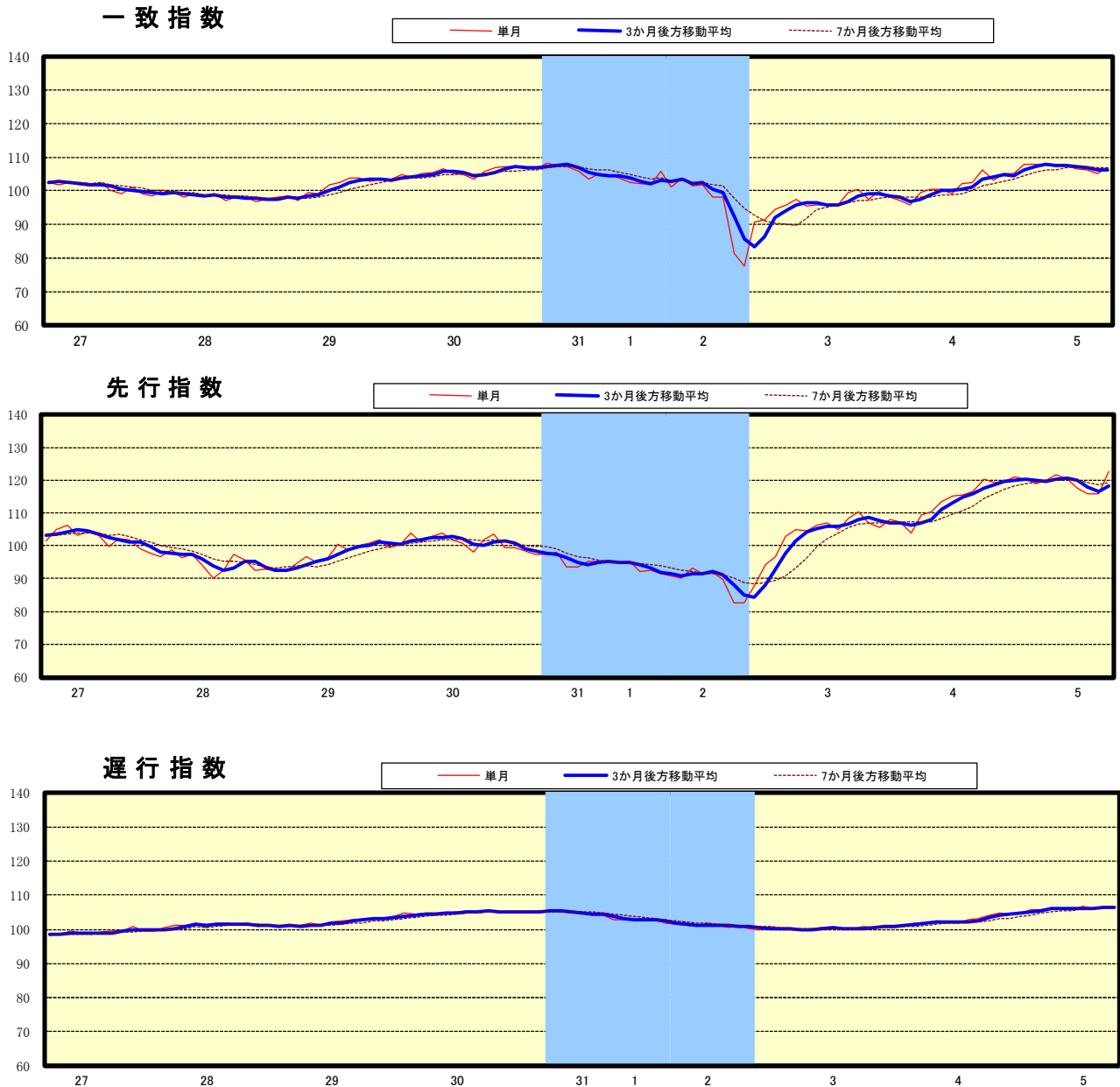
また、景気拡張期から景気後退期に変化する場合は「下方への局面変化」、景気後退期から景気拡張期に変化する場合は「上方への局面変化」となります。



4 静岡県の最近の景気動向

平成 27 年以降大きな指数の変化はありませんでしたが、平成 30 年後半から下落基調となり、新型コロナウイルス感染症の流行により令和 2 年 4 月～5 月頃に大幅に下落しています。その後、現在まで概ね上昇傾向が続いています。

図表 3 静岡県景気動向指数（C I）の推移



※各グラフの色付き部分は、景気の後退期を示す。

5 本県の最新の景気動向

令和 5 年 6 月 30 日に公表した令和 5 年 4 月分の静岡県景気動向指数は、当月 C I が上昇していますが、図表 2 の①～⑤のいずれにも該当しません。したがって、注にあるとおり、前月の基調判断「足踏み」を継続することになります。

令和 5 年 4 月の静岡県景気動向指数は、足踏みを示している。

図表4 直近6か月間のC I一致指数の推移

		R4年 11月	12月	R5年1月	2月	3月	4月
C I 一致指数	単月	107.0	107.4	106.6	106.3	105.2	106.8
	(前月差)	-0.7	0.4	-0.8	-0.3	-1.1	1.6
	3か月後方移動平均	107.6	107.4	107.0	106.8	106.0	106.1
	(前月差)	-0.2	-0.2	-0.4	-0.2	-0.8	0.1
	7か月後方移動平均	106.3	106.9	107.1	107.3	106.9	106.7
	(前月差)	0.1	0.6	0.2	0.2	-0.4	-0.2

図表5 D I一致指数の個別指標変化方向表

指標名		季節調整法等	4年								5年				
			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
一致指数			92.9	42.9	85.7	57.1	71.4	85.7	100.0	28.6	35.7	42.9	28.6	57.1	57.1
鉱工業生産指数(総合)		センサス局法	+	-	+	+	+	+	+	-	-	-	-	+	+
鉱工業消費財出荷指数		センサス局法	+	-	+	-	+	+	+	-	-	+	-	+	-
第3次産業活動指数(総合)		センサス局法	+	+	+	+	-	-	+	-	○	+	+	+	+
百貨店・スーパー販売額		センサス局法	○	-	-	-	-	+	+	+	+	+	-	-	-
人件費比率(製造業)	逆サイクル	センサス局法	+	-	+	+	+	+	+	-	-	-	-	+	+
有効求人数	除学卒パート	センサス局法	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	+
輸入通関実績(清水港分)		センサス局法	+	+	+	-	+	+	+	+	+	-	+	-	-

図表5は、静岡県のD Iを用いた一致指数の個別指標変化方向表です。3か月前と比較して、各月の係数の変化の方向を表しています。一致D Iは、景気拡張局面では50%を上回り、後退局面では下回る傾向があります。静岡県の令和5年4月のD I一致指数は、2か月連続で50%を上回りました。

図表6 直近6か月間のC I先行指数の推移

		R4年 11月	12月	R5年1月	2月	3月	4月
C I 先行指数	単月	121.7	120.2	117.6	115.8	115.9	122.5
	(前月差)	1.7	-1.5	-2.6	-1.8	0.1	6.6
	3か月後方移動平均	120.2	120.6	119.8	117.9	116.4	118.1
	(前月差)	0.5	0.4	-0.8	-1.9	-1.5	1.7
	7か月後方移動平均	120.1	120.2	120.0	119.2	118.6	119.1
	(前月差)	0.2	0.1	-0.2	-0.8	-0.6	0.5

図表6は、景気の先行性を示す先行指数です。静岡県C I先行指数を単月で見ると2か月連続で上昇し、3か月後方移動平均は4か月ぶりに上昇し、7か月後方移動平均は4か月ぶりに上昇しています。

先行指数は、一般に3か月先から6か月先の景気を予測しているとされていますが、直近6か月間でみると強弱まちまちであることから、景気の先行きの方向性については、もうしばらく様子を見る必要があるようです。

景気判断は1つだけではなく、様々な指標を読むことでより多角的に俯瞰することができます。景気動向指数以外の県内景気判断も確認しましょう。

(1) 静岡県月例経済報告（静岡県経済産業部）

令和5年4月を中心とした静岡県の景気は、物価高騰や供給制約等の影響から、一部に弱さがあるものの、緩やかに持ち直している。

先行きについては、全体としては持ち直しの動きが期待される中、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけ変更が与える影響に配慮する必要があるほか、引き続き物価高騰や供給制約等が及ぼす影響に注意する必要がある。

雇用情勢は、改善の動きに一服感がみられる。

(2) 最近の静岡県金融経済の動向（日本銀行静岡支店）

県内の景気は、資源高や供給制約の影響を受けつつも、持ち直している。

最終需要の動向をみると、輸出と公共投資は高水準で推移している。設備投資は製造業を中心に全体としては緩やかに増加している。個人消費は緩やかに回復している。住宅投資は弱含んでいる。

こうしたもとの、企業の生産は弱含んでいる。

雇用・所得環境をみると、労働需給は改善の動きが足踏みしているものの、雇用者所得は緩やかに改善している。

消費者物価（除く生鮮食品）は、前年を上回っている。

6 全国と静岡県の景気循環

次ページの図表7は全国と静岡県の景気循環及び年ごとのできごとを表しています。

内閣府は、令和4年7月19日に第21回景気動向指数研究会を開催し、第16循環の景気の山を平成30年10月、景気の谷を令和2年5月に確定しました。平成30年11月に始まった景気後退期間が令和2年5月に終わったと認定したのです。

一方で県は、令和5年4月7日に、第16循環の「景気の山」を平成30年10月、「景気の谷」を令和2年5月に確定したことを公表しました。この結果、第16循環の景気拡張期間は74か月、景気後退期間は19か月となり、拡張期と後退期を合わせた全循環期は93か月となりました。

現在は、第17循環の「拡張」局面に入っていると考えられます。

図表7 全国と静岡県の景気循環

